

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02013

研究課題名(和文) 持続可能性を基軸とした異生態系比較による「地域の知」モジュール化と公教育への応用

研究課題名(英文) Modularization of land-based knowledge for sustainability by cross-regional comparison and its application experiments to public education

研究代表者

飯塚 宜子 (Iizuka, Noriko)

京都大学・東南アジア地域研究研究所・研究員

研究者番号：60792752

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：カナダ先住民やアフリカの狩猟採集民には、カスカの守護動物、クリンギットのトーテム動物、バカ・ピグミーの精霊や植物など、動物や自然資源に特別な力を付与するような思考法が共通して見いだせる。「不可解」な環境観に出会ったフィールドワーカーは、見知らぬ考え方と自らを混淆させ、新しい認識や視座を見出す。本研究ではこれと同様なトランスカルチュラルな経験を、教室の中で、日本の児童や市民にもたやす方法論を探究した。「演劇手法」は各地域の文脈を再現し、学習者らの主体的な解釈の共創や対話を促し、身体性や物語性に富む現地の“教育方法”に近づき得る方法論であった。経験の更新と持続可能性の関係を考えさせ示唆的であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人類学や地域研究においては、他者と自らを本質的に異なる存在として描く表象や、自文化と異文化に境界を引く多文化主義に潜む暴力性への反省や問い直しが行われてきた。本研究は、グローバリズムでも多文化主義でもない「トランスカルチャー」という概念を具現化する教育方法を探究し、これまでの課題を乗り越える「他者理解の方法論」を提示した。多様な専門家や行政等が協働し、相互行為や対話の中で、市民や児童が新たな価値観を生み出す場を共創する実践研究はソーシャル・イノベーションの観点からも評価できる。また教育評価について、画一的達成目標ではなく、学習者の当事者視点から評価を行う相互行為分析アプローチの手法を提示した。

研究成果の概要(英文)：In the comparison of Canadian Indigenous peoples and African hunter-gatherers' views of the environment, we can find a common way of thinking that relates the environment strongly to humans, granting natural resources supernatural powers, such as medicine animals of the Kaska, Totem animals of Tlingit, and various spirits and plants of Baka Pygmy. Fieldwork mixes up these unknown way of thinking with their own, and provides fieldworkers with new perceptions and perspectives. This study explores how to bring similar transcultural experiences to Japanese children and citizens in the classroom. As experimental study of an educational workshop, “play-acting” was proved to encourage students' independent interpretations and dialogue, and it can be the methodology that could approach the “educational methods” of indigenous peoples, which encompass physicality and narrative. It is suggestive to consider sustainability from the perspective of the renewal of human experience.

研究分野：地域研究

キーワード：地域間比較 フィールドワーク 演劇手法 持続可能性 狩猟採集民 先住民 トランスカルチャー 他者理解

1. 研究開始当初の背景

公共人類学、公共民俗学など新たな分野の誕生にみられるように、学術研究の成果を、いかに実社会に還元していくかという公共的な視点や方法が問われている。

現代の日本社会の課題の一つが「地域」である。地域活性化、地域資源の再発見など、「地域」が未来社会のキーワードであることに疑いは無いが、地域の過疎化、地域離れは課題であり続けている。地域課題を考える時に重要な要件は「教育」である。地域住民は我が身がある地域が先細ろうとも、都市部のよりよい教育環境の中に我が子を送り出す。公教育は子どもたちを「地域から乖離させるもの」とであるとさえ指摘される。人と自然の関わり方などの継承活動は「教育の原形態」といえるが、そのありようは変容し、さまざまな課題を抱えている。同時に、特に開発途上地域では、公教育は開かれた世界や未来への希望に繋がる場であり、科学知は、発展と影響力の源泉である。科学的教育において「地域」をどう扱うかは、パラドキシカルな課題なのである。

また、特に文化人類学分野においては、他者を自らと本質的に異なる存在として描く表象形態への見直しや反省が行われており(例えばサイド 1993)、「自文化」と「異文化」を異なる存在とみなす「多文化主義」に潜む暴力性も指摘されてきた(渥美 2016)。地域の表象形態に関する再考と展開が求められている。

代表者は、公教育の場である「教室」のなかで、多様な地域について研究者が一方的に表象するのではなく、学習者が内在的に学ぶ方法論を本研究開始前に5年間研究してきた。その結果、間接的な知識情報とともに、直接的に対象を観る「フィールドワーク」と同様の効果を生むアクティブラーニングによる方法論が有効であると、その方法論は9つの要素、フィールドという「場」としての教室の見立て、学習者が対象者の主観を追う(間主観性)支援、写真、動画、音楽、モノなど非言語的手がかりの配置、学習プロセスの重視、学習者による表現の時間の確保、以上の必須要素に加え、飲食物やさらなる五感に触れるモノ、行為、ゾーニング、対象者の価値観可視化の工夫という9点を挙げてきた(飯塚 2016)。

2. 研究の目的

本研究では「環境」という視座を基軸に、地域間比較を行い、閉じた地域において継承される「地域の知」をモジュール化し、その知を公教育に適用していく方法論の開発とその理論的検証を行う。この時、「地域の知」やモジュールの内容や枠組みを明定していくプロセスが重要になる。北米先住民クリンギットやカスカの北方林、バカ・ピグミーの熱帯雨林、モンゴル遊牧民が棲む乾燥地などの多様な生態下において、通地域的な共通軸を設け、持続可能性を担保する要件を抽出する。それらを地域の全体システムを構成する「モジュール」、すなわち、ひとまとまりの機能を持つものと措定する。それらのモジュールをフィールドワークと同様の効果をねらうアクティブラーニング手法により、日本の教室において、初等教育課程の児童や市民などの学習者が学ぶ場を創出する。そして学習者が他地域から自らの地域に「転移可能な概念」を見出すか、環境観や社会観の変容を起こすか等を分析する。グローバルな地域と自分が生きる地域の「連続性のある概念」形成の手法とプロセスを明らかにする。

3. 研究の方法

【1】協働フィールドワークによる3つの地域のモジュール検討と定位

北米先住民クリンギット/カスカの北方林、中部アフリカ、バカ・ピグミーの熱帯雨林、モンゴルの遊牧民が棲む乾燥地の草原について、それぞれの地域を専門とする研究者と共にフィールドワークの協働を行う。大きな比較軸としては、生態資源を利用し続ける仕組み、人々の環境観、環境を媒介とする人間関係という3点を、地域の全体システムを構成する「モジュール」、すなわち、ひとまとまりの機能をもつものと措定する。地域間比較により、人と環境の関係を持続的に保持する要因について共通性と多様性について議論を行う。

【2】日本の教室でのプログラム開発と実践

初等教育課程の学習者と市民を対象に、北米、中部アフリカ、モンゴル草原における人々の暮らし方や環境観を紹介するワークショップ実践を行う。「地域の知」は暗黙知も包摂し、科学知として記述するだけでは、その全体像を伝えることは難しい。「アクティブラーニング」手法をさらに検討し、いずれのモジュールとの出会いがどのような学習効果をあげるのか、実証的に検証をおこない、学習者が住む「地域」と世界地域を連関させて考えるワークショップ手法、その時何が転移可能な概念となるか等検証を行う。学習方法論を開発するとともに、地域の知の内容とモジュールについてもさらに検討を加えていく。

【3】理論的検証

学習者の環境観や社会観の変容、非連続であった「私の地域」と世界地域の地域概念の連関、またモジュールの定位やモジュール間関係の比較により、地域を超えた「構造の相似性」を検討することができるか、地域知と公教育の相互補完的教育は可能かなどについて理論的検証を行う。

4. 研究成果

【1】協働フィールドワーク

2017年、山口、島村、飯塚がカナダのユーコン準州のクリンギット先住民のコミュニティを訪問し、先住民同化政策下のレジデンシャル・スクールのあり様やその後のコミュニティが抱える困難や和解、トーテム動物を表象する伝統的なリグリアや狩猟に関する今日のあり様についての聞き取りを行った。

2018年、大石と飯塚がカメルーンのアボン＝ムバングを訪れ、狩猟採集民バカ・ピグミーの子どもたちの生態学的知識の継承と学校教育についての聞き取りを行い、現地NGOや大学関係者とバカ・ピグミーの“環境教育”をテーマにした国際ワークショップを開催した。

2019年、山口と飯塚は再度カナダを訪れ、クリンギットによるテリトリーの湖を6日間かけて横断するカヌー行事や、3つネーションや非先住民やメディアなどと伝統的アート、歌、踊り、食、薬草の知識などが共有された3日間のセレブレーションに参加した。

大石、山口が参加する予定であったモンゴルへの協働フィールドワークは日程調整の困難等により実施できなかったが、共同研究者や演劇教育者、演劇教育研究者、パフォーマーらが集う研究会を4度開催し、意見交換を行った。

島村の報告は次のようであった。2017年度は、カナダにフィールドワークを行い、先住民が彼らの言語や文化を破壊してきた白人に対して彼らが批判的に捉えながらも、「赦している」在り方に考えさせられた。子ども向けのワークショップでは、参加者である子どもたちが「言語化されないものを感じ取る」ことを目的のひとつとしていた。しかしワークショップを通じて、モンゴル遊牧民の環境に優しいはずの「地域の知」が、子どもにとって「おぞましきもの」として捉えられることに気づいた。いわばワークショップに「生の経験」を浸入させることの可能性と不可能性である。こうした問題意識をもとに2018年度もワークショップに参加したが、やはり子どもたちはモンゴルの「飼っていた動物が死んだとき、その毛皮や骨を利用する」という文化に嫌悪感をいだいていたことが再確認された。こうした子どもが嫌悪するような皮膚感覚的なものの中にこそ、異文化に対する差別意識を生み出す何かがあるのではないだろうか。子供は決して純粋無垢で存在ではなく、むしろ子供を通じて大人が引き起こす諸問題の基本構造が見えてきたように思われた。2019年度は、こうした経験が紡ぎだしていく知について考察したが、具体的な成果を出すことはできなかった。

山口の報告は以下のものであった。フィールド調査自体の目的のひとつにワークショップに還元できるようなモノゴトを探す、という項目加わったことで、これまでと違う視点から調査を実施するとともに、活用という観点から資料・データの収集法を見直すことができた。また、3年間を通じてワークショップを実施する中で、講義形式から演劇的手法や物語の読み聞かせといった手法へと変化していき、その中で子供たちの反応や、講師側の取り組み方、意識にも変化が見られた。具体的には、より対話的になり、積極性や没入感が増したように感じている。なかでも、動物を殺すことや精霊の概念など狩猟採集文化において共有されている考え方をどのように伝えたらよいかという点は困難な問題だったが、ダイレクトに言葉で説明するより、演じながら考えてもらう、神話を通して感じてもらうという、ある意味では現地での教育方法に近い手法をとることが効果的であるように感じた。今後はこうした感触を分析、言語化していくとともに、これまでの事例を検討したうえでワークショップのプログラム開発にフィードバックさせる必要があるだろう。

大石は、カメルーンにおける国際ワークショップを中心にすすめて、今日、バカの子供たちが裨益している学校教育モデルの抱える困難な点と成功している点はなにか、伝統的生態学知識の次世代への伝承を阻害している要因はなにか、学校教育と森での伝統的生態学的知識の伝承をどう調和させたらよいか、バカの伝統文化は、今日のグローバルな世界においてどのような価値をもっているだろうかなどの問いを提起した。この成果は2018年度アフリカ学会において発表を行った。またフィールドワークで生成される経験と、教室における経験が如何に共通項を持ちえるかという問いに対して「トランスカルチャー」という概念から理論的貢献を行った(飯塚、園田、田中、大石 2020)。今後の課題として「カメルーンの現地と日本でのワークショップの成果をどう共有できるのか」を挙げている。

【2】日本の教室でのプログラム開発と実践

教室のなかで、「フィールドワーク」を行うプログラム開発を行い、ワークショップを実践する主体として、「マナラボ 環境と平和の学びデザイン」という実践研究コミュニティを立ち上げ、ホームページを開設した(<http://manalabo.org/>)。各地域で長くフィールドワークを行ってきた地域研究者、人類学者やファシリテーターのみではなく、演劇を専門とするパフォーマーや、教育研究者とも連携し、演劇教育研究者の渡辺貴裕氏(東京学芸大学)が主宰する「学びの空間研究会 WEST」の諸先生方に協力を頂いた。特にアフリカ研究者の園田浩司氏(日本学術振興会)は、プログラム開発と実践のみではなく、相互行為分析アプローチを用いて本研究のプログラム実践の評価軸を導入した。

ワークショップはいずれも2時間のプログラムとして構成し、京都大学東南アジア地域研究

研究所のセミナー室を会場とした。学習者の身体感覚が働くよう、教室から机椅子を撤去し、壁面には A2 や A3 サイズに引き伸ばした風景等の写真を配置した。学習者は現地で蒐集されたモノに触れ、衣類を着用し、現地の言葉による名前を与えられ、現地の人々になってみる「ロールプレイ」を基本とするプログラムを実施した。導入時には、現地の場所を地図で確かめ、気候や地理、狩猟採集などの生業、動物や植物などへの在来知など、基本情報を共有した。学習者のインロールとアウトロールを明確にし、インロール後は、食物の試飲や試食を行い、民話や神話などの朗読劇をスタッフが演じるなど、現地では当たり前であるが日本の市民にとっては「不可思議」に思えるような考え方の紹介を行った。学習者は儀礼や歌や踊りなど、現地で行われる行為の模倣を行い、グループを形成し、「不可思議」な考え方に基づく即興劇を創作し、発表を行った。アウトロール後には、通常自分の立ち位置に戻り、学びを振り返り、記述し、考えたことのシェアリングを行った。帰宅後に記述するアンケート等も配布した。

このようなワークショップを、京都市内の初等教育課程の児童と市民を対象に、2017 年度に 6 地域のプログラムを 2 回ずつ 12 回（参加者 194 名・スタッフのべ 63 名）、2018 年度ワークショップ 5 地域のプログラムを 2 回ずつ 10 回（参加者 152 名、スタッフのべ 56 名）、2019 年度ワークショップ 4 地域のプログラムを 2 回ずつ 8 回（参加者 150 名、スタッフのべ 58 名）実施した。いずれも 1 回 2 時間のワークショッププログラムを午前・午後の 2 回実施した。いずれも児童が主体であるが、保護者にも積極的な参加を依頼した。写真や動画撮影を行い、ワークシートの記述なども含め、記録は研究目的に活用する許可を得た。

これらの実践には、京都府が実施する「大学連携環境学習プログラム実施事業」の委託を受け、京都府環境部地球温暖化対策室の協力を得た。また京都市教育委員会の後援を得て、京都市内の市民や児童の参加者を一般募集した。研究者と児童や市民の相互行為の機会を設けるために、学術機関単体ではなく、行政や教育機関との連携など、ソーシャル・イノベーションの観点が重要と思われた。なお、比較検討のため、市民や子どもたちと、バーチャルではない京都の地域の森へのフィールドトリップも実施した。

【3】分析と理論的検証

方法論の展開 パフォーマンスによるトランスカルチャルな経験

トランスカルチャリズムとは、グローバリゼーションや多文化主義と異なり、「異なる文化システムに属するとされる諸要素が、ひとりの人間の行為や意識の中で分裂的というよりシステムティックに共存している、その個人が生きていることの実相を形成している」（佐藤 2019: 71; Epstein 2009）という考え方である。フィールドワーカーの現地における経験は、出会う文化と自らの文化を混淆させ、現地の人々と解釈を共創し、新しい視座や考え方を生み出すという意味で、実にトランスカルチャルなプロセスであるといえる。このプロセス自体を、教室の中で児童や市民自らが構築するために、本研究は演劇手法に着目した。フィールドに身を置き、モノに触れ、視覚や聴覚などの五感を動員し、また人々が行う行為をなぞるなどして他者理解に近づくフィールドワークの他者理解の方法は、「ある想定のみか」「自分ではないが自分でもある」者が何を話すのかどう動くのか体験」（飯塚 2019: 70）する演劇手法と共通性があるという考えに基づいている。

ワークショップの実施後、2 つの実践を取り上げ、プログラムの詳細を明らかにするとともに、撮影した動画の会話を書き起こし、実際に生じた相互行為分析を通し、教室にフィールドがどのように立ち上がったか、またそれらが学習者にどのような経験をもたらしたかを検証した。

バカ・ピグミーの分配を模倣するロールプレイにおいて、学習者はまず反発や類推の後、「自分で獲った動物は自分の所有物ではない」という見知らぬ考えに基づく行為をなぞり、「なんとなく分かる」様子を見せ、一定期間であるとしても、彼らの中で継続しうる概念となり得る様子が認められた。精霊に出会うロールプレイにおいては、自分の日常の経験を参照し、講師の解説に疑義を発し、客観的な資料を要求するなどマルチな他者理解への接近が認められた。「精霊ジェンギはおばけか」という問いをめぐっては、問いを自らの文脈に転移し、ジェンギを自分ごと化する学習者の様子が見られた（飯塚、園田、田中、大石 2020）。

守護動物を持つカスカのロールプレイを行った学習者は、カスカの模倣を行っていたのだが、最終的には、動物に対する自らの考えの変容を述べ、またその「自らの考え方がカスカに似ている」と記述した。ここにはカスカの模倣を行っていたはずの客体が、新たな考え方の主体になるという、主客の逆転が起こっていた（飯塚 2020）。

実践の中で、複数の文化の間に境界線を引くのではなく、他者を異なる者として帰結せず、自らのなかに共存する他者を手掛かりとする「文化理解」が行われたといえる。人間はトランスカルチャルな存在であるという前提から考える演劇手法は、今後の地域理解や他者理解の可能性を示唆するものであると思われた。

持続可能性のモジュール考察

最後に多様な地域における環境や文化を「持続可能」なものにするモジュール的な要因を考察した。本研究で分析対象としたのは、カナダの先住民社会カスカとクリンギット、アフリカ中部のバカ・ピグミーという、いずれも狩猟採集社会であった。これらの社会において自然資源は個人の所有物ではなく共有の資源とみなされ、獲物は貨幣経済を介さずに、贈与によって共有され

ることは広く指摘されている。そして彼らの社会において、そのような自然資源には、特別な力があると見なす環境観が認められる。カスカのメディスンアニマル、クリンギットのトーテム動物や「先祖」との共存、バカ・ピグミーが共存するジェンギなどの多様な精霊や力を持つ植物など、人間以外の力を物語化・象徴化し、自らと関連づけることが行われている。そのような考え方を社会的に再構築する制度や慣習、儀礼などは、今日の状況に適應するよう、教育や社会に導入されている。伝統は変化しないものではなく、更新され、創意工夫を加えられ、現象学的な環境との相互関係を再構築していく。

狩猟採集社会は数万年の持続可能性を持っていたが、その社会において認められる環境観を、日本の市民や児童が自らと重ね合わせて理解するためには、近代教育の中で排除されがちな、身体性や物語性が有効であった。文化や環境の持続可能性は、個々の人間の経験の更新の連続性の上に成り立っているのではないかと考えさせられた。今日、教育学の分野において、身体性を活用すべきという議論が見られる。また物語の力も繰り返し述べられてきたものである。もし近代社会の基層にも、持続可能性を包摂する物語が胚胎しているならば、その経験を更新する教育の方法として、また同時に地域研究の成果を社会に開く方法論として、パフォーマンスや演劇手法、また身体性や物語性が有効性を持つかは示唆的であり、今後も検証していくことを課題としたい。

渥美一弥 2016「多文化主義という暴力」『文化人類学』81(3):504-521

飯塚宜子 2016「多様な異文化の民俗に学ぶ環境教育」同志社大学、博士論文

飯塚宜子 2019「ロールプレイ」鈴木康久・嘉村賢州・谷口知弘編『はじめてのファシリテーション - 実践者が語る手法と事例』70-71、昭和堂

飯塚宜子、園田浩司、田中文菜、大石高典 2020「教室にフィールドが立ち上がる アフリカ狩猟採集社会を題材とする演劇手法を用いたワークショップ」『文化人類学』85(2)

飯塚宜子 2020「教室に再現するフィールド パフォーマンスによる北米先住民カスカの民族誌」『人類学者によるフィールド学習論 課題解決型プロジェクト学習と自己変容』箕曲在弘、小西公大、二文字屋脩編著、ナカニシヤ出版

佐藤知久 2019「魂/機械/知性 トランスカルチャー状況とハイブリッド化をめぐる人類学的考察」『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築(第三回)』床呂郁哉(編)、64-79、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

サイード, E.W 199(1978)『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修,今沢紀子訳,平凡社.(Said, E. Orientalism. Georges Borchardt Inc.)

Epstein, Mikhail 2009 "Transculture: A Broad Way Between Globalism and Multiculturalism." *American Journal of Economics and Sociology*, 68(1):327-351.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計22件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 飯塚宜子、園田浩司、田中文菜、大石高典	4. 巻 85(2)
2. 論文標題 教室にフィールドが立ち上がる アフリカ狩猟採集社会を題材とする演劇手法を用いたワークショップ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 飯塚宜子	4. 巻 -
2. 論文標題 教室に再現するフィールド パフォーマンスによる北米先住民カスカの民族誌	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人類学者によるフィールド学習論 課題解決型プロジェクト学習と自己変容	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 飯塚宜子	4. 巻 -
2. 論文標題 ロールプレイ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 はじめてのファシリテーション - 実践者が語る手法と事例	6. 最初と最後の頁 70-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 飯塚宜子	4. 巻 -
2. 論文標題 フィールドワークの疑似体験で地域や人間の多様性に学ぶ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 はじめてのファシリテーション - 実践者が語る手法と事例	6. 最初と最後の頁 158-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯塚宜子、園田浩司、田中文菜、大石高典	4. 巻 -
2. 論文標題 人類学の知を子どもと共有するために - 狩猟採集民バカに学ぶワークショップを通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 一般社団法人日本環境教育学会第30回年次大会研究発表要旨集 自然と教育・・・初心へ	6. 最初と最後の頁 134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯塚宜子、園田浩司	4. 巻 -
2. 論文標題 民族誌資料の手触り - アフリカ狩猟採集社会を題材にした演劇手法を用いたワークショップ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本国際理解教育学会大会発表要旨	6. 最初と最後の頁 146-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯塚宜子	4. 巻 -
2. 論文標題 パフォーマンスによる社会との対話 - ワークショップ「動物と話す方法」の開発と実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文化人類学会第53回研究大会発表要旨	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口未花子	4. 巻 -
2. 論文標題 近代化と知識変容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 森林科学シリーズ第12巻森林と文化 - 森とともに生きる民俗知の行方 -	6. 最初と最後の頁 118-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口未花子	4. 巻 48(5)
2. 論文標題 動物」にとって気候変動はいかに経験されるのか：カナダ北方の森からの視座	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 164-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山口未花子	4. 巻 -
2. 論文標題 内陸トリリングットと描かれた動物	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 第34回北方民族文化シンポジウム網走報告書	6. 最初と最後の頁 47-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石高典	4. 巻 -
2. 論文標題 野生鳥獣肉の持続的な消費：日本の課題をグローバルにとらえ返す	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 農業と経済	6. 最初と最後の頁 46-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石高典・飯塚宜子	4. 巻 -
2. 論文標題 カメルーンのパカ・ピグミーにおける在来知識と学校教育 - ローカルNGOとの対話から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本アフリカ学会第55回学術大会研究発表要旨集	6. 最初と最後の頁 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iizuka, Noriko	4. 巻 -
2. 論文標題 Land based Wisdom and the Modern Education: Daily Use of Medical Plant by Tlingit First Nation in Canada	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceedings of International Symposium: Technology the Rules of Mathematics and Sciences for Sustainable Development	6. 最初と最後の頁 27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iizuka, Noriko	4. 巻 -
2. 論文標題 Sustainable Development in Rural Community of Taku River Tlingit, Northern Canada: Religious Story-Telling as the Factor of Educating Relationship to the Environment	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Proceedings of International Workshop on the Role of University in Promoting GNH through Practice and Rural Development	6. 最初と最後の頁 22-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石高典	4. 巻 -
2. 論文標題 カメルーンのパカ・ピグミーにおける犬をめぐる社会関係とトレーニング	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 犬からみた人類史	6. 最初と最後の頁 170-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Oishi, T., Fongzossie, F.E	4. 巻 -
2. 論文標題 A preliminary report on the diversity of forest landscape recognition among the Baka hunter-gatherers of Eastern Cameroon	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ASC-TUFS Working Papers 2019: Challenges of Development and Natural Resource Governance in Africa	6. 最初と最後の頁 247-257
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 島村一平	4. 巻 -
2. 論文標題 モンゴル文化と女性：家事と育児をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 乳房文化研究会2018年度講演録	6. 最初と最後の頁 11-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計25件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 飯塚宜子
2. 発表標題 パフォーマンスによる社会との対話 - ワークショップ「動物と話す方法」の開発と実践」
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯塚宜子、園田浩司、田中文菜、大石高典
2. 発表標題 人類学の知を子どもと共有するために - 狩猟採集民バカに学ぶワークショップを通して
3. 学会等名 日本環境教育学会第30回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯塚宜子、園田浩司
2. 発表標題 民族誌資料の手触り - アフリカ狩猟採集社会を題材にした演劇手法を用いたワークショップ
3. 学会等名 国際理解教育学会第29回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯塚宜子
2. 発表標題 パフォーマンス・エスノグラフィーを応用した地域研究方法論の共同研究
3. 学会等名 令和元年度共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」年次研究成果発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 飯塚宜子、大石高典、山口未花子、島村一平、關雄二、長岡慎介、小林舞、川那辺香乃、坂本龍太
2. 発表標題 生態知・伝統知の地域間比較と教育への応用に関する共同研究
3. 学会等名 海外学術調査フォーラム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯塚宜子
2. 発表標題 カナダ先住民の暮らし方や環境観を体験するワークショップ開発
3. 学会等名 学びの空間研究WEST第29回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯塚宜子
2. 発表標題 パフォーマンス・エスノグラフィーを応用した地域研究方法論の共同研究
3. 学会等名 京都大学東南アジア地域研究研究所平成30年度共同利用・共同研究拠点「東南アジア研究の国際共同研究拠点」年次研究成果発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯塚宜子
2. 発表標題 環境ワークショップデザインの技法と視点
3. 学会等名 京都府 WE DO KYOTO! ユースサポーター修了式(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯塚宜子、山口未花子
2. 発表標題 「動物と話す方法」プログラム開発
3. 学会等名 パフォーマンス・エスノグラフィーを応用した地域研究方法論の共同研究研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大石高典、飯塚宜子
2. 発表標題 カメルーンのパカ・ピグミーにおける在来知識と学校教育 ローカルNGOとの対話から
3. 学会等名 日本アフリカ学会第55回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 OISHI Takanori
2. 発表標題 How can local stakeholders make the room for negotiation?: Addressing the paradox of 'participation' and 'community' in forest management policies in southeastern Cameroon
3. 学会等名 The First IUFRO (International Union of Forest Research Organizations) social sciences conference on "African forest-related policies and politics(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 IIZUKA Noriko, OISHI Takanori
2. 発表標題 Relier les enfants du monde par l'education environnementale: au-dela de la nature et du monde de la ville
3. 学会等名 L'atelier internatinal: Potentiel de l'education environnementale chez les enfants Baka du Cameroun (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Iizuka Noriko
2. 発表標題 Land based Wisdom and Education: Usage of Medical Plant by Tlingit First Nation in Canada
3. 学会等名 International Symposium "Technology the Rules of Mathematics and Sciences for Sustainable Development (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 飯塚直子
2. 発表標題 持続可能な社会のための「地域の知」の意義 - 異文化比較からの学び
3. 学会等名 同志社大学2017年度 第8回 政策学会セミナー (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Iizuka Noriko
2. 発表標題 Sustainable development in rural community of Taku River Tlingit, Northern Canada: Potentiality of indigenous cultural exchange
3. 学会等名 International Workshop on the Role of University in Promoting GNH through Practice and Rural Development (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 飯塚宜子
2. 発表標題 地域多様性に学ぶ公共的实践
3. 学会等名 科研費基盤研究(C)「持続可能性を基軸とした異生態系比較による「地域の知」モジュール化と公教育への応用」第二回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山口未花子
2. 発表標題 先住民カスカの生業を通じた変化と現状
3. 学会等名 平成29年度日本カナダ学会第42回大会一般公開国際シンポジウム「カナダ先住民の歴史と現状」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山口未花子
2. 発表標題 2017年度モジュール科研報告
3. 学会等名 科研費基盤研究(C)「持続可能性を基軸とした異生態系比較による「地域の知」モジュール化と公教育への応用」第二回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島村一平
2. 発表標題 地球たんけんたいワークショップおよびカナダ調査の報告
3. 学会等名 科研費基盤研究(C)「持続可能性を基軸とした異生態系比較による「地域の知」モジュール化と公教育への応用」第二回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 OISHI Takanori, Helene AYE MONDO
2. 発表標題 Introduction for " L'atelier internatinal: Potentiel de l'education environnementale chez les enfants Baka du Cameroun"
3. 学会等名 L'atelier internatinal: Potentiel de l'education environnementale chez les enfants Baka du Cameroun (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島田将喜、高橋康介、大石高典、錢昆
2. 発表標題 多文化比較フィールド実験研究を実現すること
3. 学会等名 日本視覚学会 2018年冬季大会・大会企画シンポジウム (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大石高典
2. 発表標題 京都とカメルーンのワークショップで考えたこと
3. 学会等名 科研費基盤研究 (C) 「持続可能性を基軸とした異生態系比較による「地域の知」モジュール化と公教育への応用」第二回研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p> マナラボ 環境と平和の学びデザイン http://manalabo.org/ 京都で世界を旅しよう！2017 地球たんけんたい6 http://superhappysky.tumblr.com/ マナラボ 環境と平和の学びデザイン https://www.facebook.com/ManalaboLearningDesign/ 東南アジア地域研究研究所 カメルーンのパカ・ピグミーと環境教育をテーマにした国際ワークショップ開催 https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/2018/02/20180205/ 東南アジア地域研究研究所 子ども・親子向け ワークショップ 京都で世界を旅しよう！2017 https://kyoto.cseas.kyoto-u.ac.jp/2017/10/2017_kyoto_de/ 京都府 大学連携環境学習事業 http://www.pref.kyoto.jp/tikyu/daiagakurenkei.html </p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大石 高典 (Oishi Takanori) (30528724)	東京外国語大学・現代アフリカ地域研究センター・准教授 (12603)	
研究分担者	山口 未花子 (Yamaguchi Mikako) (60507151)	北海道大学・文学研究院・准教授 (10101)	
研究分担者	島村 一平 (Shimamura Ippei) (20390718)	滋賀県立大学・人間文化学部・准教授 (24201)	
研究協力者	關 雄二 (Seki Yuji) (50163093)	国立民族学博物館・人類文明誌研究部・教授 (64401)	
研究協力者	長岡 慎介 (Nagaoka Shinsuke) (20611198)	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授 (14301)	
研究協力者	田中 文菜 (Tanaka Ayana) (50410444)	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・博士後期課程 (14301)	
研究協力者	渡辺 貴裕 (Watanabe Takahiro) (50410444)	東京学芸大学・教育学研究科・准教授 (12604)	
研究協力者	小林 舞 (Kobayashi Mai) (30782297)	総合地球環境学研究所・研究部・機関研究員 (64303)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	矢野原 佑史 (Yanohara Yushi)	京都大学・アフリカ地域研究資料センター・特任研究員 (14301)	
研究協力者	アミ ムティア (Ami Muetia)	同志社大学・グローバル地域文化学部・嘱託講師 (34310)	
研究協力者	川那辺 香乃 (Kawanabe Kano)	B R D G ・ ファシリテーター	
研究協力者	山口 恵子 (Yamaguchi Keiko)	B R D G ・ 俳優	
研究協力者	弓井 茉那 (Yumii Mana)	B E B E R I C A ・ 俳優	
研究協力者	渡辺 美帆子 (Watanabe Mihoko)	二十二回 ・ 俳優	
研究協力者	藤原 由香里 (Fujiwara Yukari)	八幡市立美濃山小学校・教諭	
連携研究者	園田 浩司 (Sonoda Koji) (20795108)	京都大学・アフリカ地域研究資料センター・特任研究員 (14301)	